

言語・文学分野の参照基準 2012年7月14日 日本学術会議

「文学教育に関わる参照基準」についてのコメント

明治学院大学文学部専任講師／日本学術会議特任連携会員

小野正嗣

文学の定義（配布資料「参照基準案」1頁下段～2頁上段）

(……) 文学という語は、今日、言語によって生み出される芸術作品とその総体を意味する。そしてそれを読み、解釈し、考察し、その成果を文章で書き記し、さらには作品としての文学を創作することも、また文学の名で呼ばれる。この意味での文学が、リテラシーとしての文学と並んで、学問そして教育分野としての文学を構成する。リテラシーとしての文学が相手にするのは、基本的にはあらゆる文書・典籍であるが、その中核には、言語芸術としての文学作品がある。リテラシーの修練において手本となるのは、当該言語の表現力を発揮した文章であり、その典型が文学作品だからである。また、文学作品は、リテラシーの修練のための優れた素材であるばかりではない。それはきわめて多様な感覚、感情、思想、精神が、作家による一貫した視点から統合された表現である。それを通して我々は、他者の多様な体験を自分の中にいきいきと保ちつつ、自らの人格の陶冶に役立てることができる。他者の体験に裏付けられた人格とは、その人の外側から見れば、いわゆる教養に他ならない。こうしてリテラシーとしての文学と文学作品の学びとしての文学は不可分の関係にある。

文学の特性（配布資料「参照基準案」の3頁中段）

(……) 人間には、言葉を通じて人とつながろうとする本源的欲求がある。他者にむけて、その心に働きかけようとして、言葉が発せられ、書きつけられるとき、芸術としての文学が生まれる。それは、想像力と共感の力を涵養し、「いま、ここ」にはいない他者と自分を結びつけ、人々の新たな関係性、社会、世界との結びつきを作りだす。芸術作品としての文学は、そのような言語活動の成果である。そして、そのなかでも多くの人に受容され、さらには時と所を越えて後世に伝えられる作品が古典となり、それが文化と教養の基盤となる。このような意味での文学を学ぶことが、文学教育のもうひとつの根幹である。

文学を学ぶことの意義とは？

——言葉を通じて、他者の世界を想像する能力、他者に対する共感の能力を養い、それがより豊かな自己理解につながる。

- 1) 言葉によって、時間的にも空間的にも遠い世界（他者の外的世界）を想像・理解する。
- 2) 言葉によって、他者の「心」（他者の内的世界）を想像・理解する。

（しかし文学作品が提示する他者の世界に対して我々はどこまで無力である）

- 3) 想像と共感を可能にする言葉が、どのように作り上げられ使われているかを理解する。
- 4) 言葉を通じて他者を理解することで、「いま、ここ」、そして「自分」をよりよく理解する。